

行つて、先着の旅行者達の取調が済むのを待つのである。

由緒のある婦人の旅かと思へて、門内に駕籠を停めさせ、乗物のまゝ取調を受けてゐるものがあつた。

「髮長御一人」

乗物の側で起る聲を聞いた。

駕籠で來た婦人は、いくらかの袖の下を、番人の妻に握

らせて、壁のやうに通行を許されたのだ。

半藏の順番が來た。調べ所の壁に掛る突棒、さす又などのいかめしく眼につくところで、階段の下に手をついて、かねて用意して來た手形を役人達に取出して見せるだけで済んだ(一六)。

木曾の福島關所は、凡そこんなものであつたらしい。

## 東北漫歩

(福島縣之卷) (一)

## 和泉生

源義家が奥州征討の折、燦爛と咲き誇る櫻樹の下に馬を鞍じ

吹く風を勿來の關と思へども

みちもせに散る山櫻かな

と詠じた勿來の關跡は、茨城福島兩縣界に在り、東は大海渺々涯しなく、西は峻嶺巖々として遠く連り、縣崖絶壁大

を摩し、當時は白河・念球と共に奥州三關と稱せられ、陸奥の拓植と東夷の猖獗を鎮撫するため、軍事的に構築されたものであつた。老松鬱蒼と繁茂し、松籟潮音に和する雅趣は、關東の宮、義家矢の根の清水、宗任淚石、義家の墓碑等の史蹟に往古の繪卷が偲ばれる。關趾を北進すれば植田町であるが、延長五百二十米の威容鮫川橋が白蛇の如く

横はる。昭和十二年度より直轄の手に掛りて三十七萬圓を要し、官民協力の下に、昭和十四年七月之が新装を遂げ、同月二十四日、内務大臣代理として山崎土木局長の臨席を仰ぎ、いとも嚴肅裡に竣功式が舉行された。縣下六號國道の關門鮫川橋と、濱通り第一の商工都市として殷賑を極むる平市外れの夏井川に、同じく直轄事業として昭和十一年度に架設された平神橋の兩橋が、無盡の炭坑を埋藏する石城地方の鑛産交通に、如何に目醒しい貢獻を爲しつゝあるかは想像に餘りあるのであらう。

六號國道の直轄改良工事が、最近物凄く擡頭的地位を占むるに到つた動機は、無論近代交通の激變に寄する一般民の深き認識が然らしむるであらうが、老骨と雖も壯者を凌ぐ平市長青沼鋒太郎氏の努力を見逃す譯にはゆくまい。鮫川・平神の二橋と言ひ、昭和十四年度に於ける平市湯本町間の改築と言ひ、共に青沼氏の獅子奮迅の勞が齎した賜物であることは否めなす。

徳川末期櫻田門外の異變後、老中の職を荷つて維新劇の

立役者たりし安藤侯の舊城下平市は、昭和十二年六月一日隣村の平窪村を合併し市制を實施した。常磐大炭田の中心地に位し、石城七濱を近くに控へて、其の活況は遙かに福島・郡山・若松の三市を凌ぐ。維新の兵燹に残つた平城唯一の舊蹟丹後澤は、丹後なる者、難工の築堤に自ら人柱となつたと謂ふ劇的なものであり、今は昔の十分に縮小した湖上を、モダンな白いボートが鷗の様に浮遊し、東北一の櫻を誇る松が岡公園の花吹雪は、赤い百萬燈の灯に映えて一大不夜城を現出する。

散りはてて枯木ばかりと思ひしを

日入りて見ゆる谷のみみじ葉

と大町柱月翁が歎賞した夏井の谿谷は、初夏の新緑と秋の滿山に燃ゆる紅葉は車窓の名畫であり、其の奇景は長壽に劣ならなす。

平市を出ると些か國道らしい形態となり、平市以南の國道に比較すれば、ほつと一息つくが、陸前濱街道の昔影を脱しない。釣天狗の樂園仁井田川を渡り、毎年舊正月十日頃

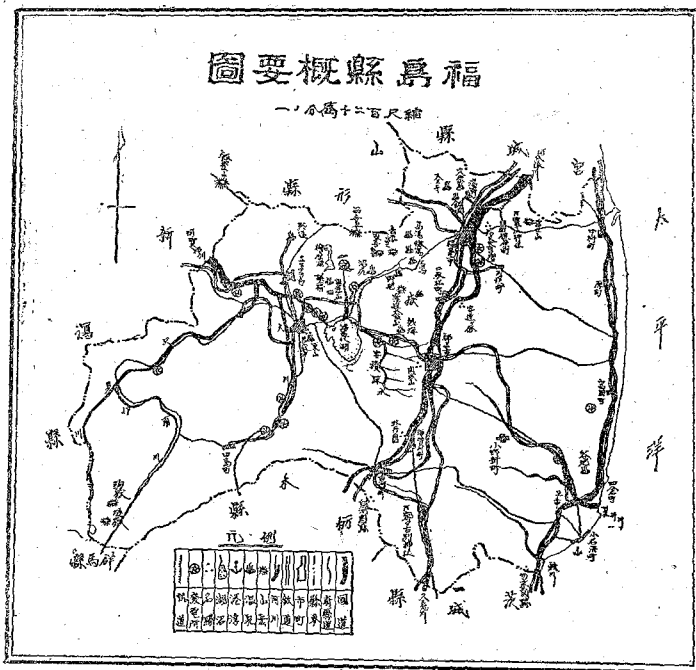
から鯉川を挟んで、海岸に新町組仲町組の二派に分れ、數百名の青少年達が相對峙し、

互に諸所へ薪を積重ねて火を焚き、一齊に喊聲を擧げながら燃えさかる薪を投げ合ひ、追ひつ追はれつ海邊を修羅場化する奇習火打合の四倉町を抜け、黒光りする小豆石に敷き詰められる久の濱特異の海岸美を愛でつゝ常磐線に沿ふと木戸驛が眼に附く。

昨年七月十二日、江名町民二十二名を乗せた大型バスが、木戸驛構内踏切に於て、午前六時三十七分上野

行列車と衝突し、十一名の死者と十一名の重輕傷者を出し

在る内務省は、斯る交通禍の根絶を期せんと、數年前より、



た記録的椿事は、鐵道當局の責任を糾彈し、平面交叉除却の急務に對する輿論轟々たるものがあつた。死傷者の大半は何れも零細なる金を貯蓄し、發祥一千年祭の壯嚴なる式典「野馬追繪卷」を觀んものと繰り出した人々だけに、此の悲惨劇に集まる社會の同情は想像以上であつた。勿論其の責任は鐵道當局の負ふべきものであつたに拘らず、當時の某新聞がバス運轉手の重大なる過失として葬つた記事は餘りに認識不足ではなからうか。道路行政監督の衝に

平面交叉除却工事費の分擔に關し、屢々鐵道省と折衝したるも、未だに協定成立の機運に到らぬ状態である。斯る除却工事は、道路を占用せる鐵道側に於て、當然執行すべき筋合のものであり、内務省から尻を叩かれてやつと現下の交通情勢を見直す狼狽振りでは、陸運交通の元締役が疑し。

頑迷なる鐵道省の猛者を糺さんと、内務省に於ても昭和十二年五月、府縣道に關する限り平面交叉を承認せざる確固たる方針を樹立し、鐵道建設線に對する監視を嚴重にした。然るに建設側の圖々しさはどうだ。道路管理者に一應の協議も無く、知らぬ顔の半兵衛を氣取つて平面交叉の工

事を進捗せしめ、マツタと氣合ひを掛けられて詭辯これ努める醜態だ。其の揚句が鐵道開通に酔ふ地元民を煽動する。何たる卑怯さであらう。それでも天下のお役人で御座るかと言ひたくなる。そのくせ、國道や府縣道の改良工事に因り、鐵道との平面交叉を除却し得る場合の彼の態度は實に憎々しい。分擔金は出さず、剩へ不當の豫納金を平氣で請

求する。時には分擔金に應じた前例もあるが、雀の涙と言つた方が當る。此の爲、今日迄どれだけの道路工事執行者が泣かされたことだらう。鐵道關係の道路工事が、全國を通じ、一箇所として豫定期日に竣功し得なかつた過去の經緯が生きた證據である。利己主義一點張りでは步調の整ふ筈が無い。二言目には豫算が無いとの逃口上はもう耳蝟だ。自發心と協力がなかつたら到底圓滿解決は望めない。屁理窟としてみつたれ根性を淡泊り清算し、欣然内務省案に手を打つてこそ、明朗交通の黎明期が訪れるといふものだ。然らざれば、人道の敵として永遠に怨嗟の聲は絶えぬであらう。

福島市との省營バスが開通して以來、微かに息を吹き返した浪江町の北に、小高町・原ノ町が續く。野馬追祭の地として著名である。

相馬野馬追祭は毎年七月十一日より向ふ三日間原ノ町を中心に、舊相馬領を擧げての大祭として執行される。今を去る一千年前承平年間、相馬の祖先平將門公が、關東の豪

旗として下總國に居住の時、小金ケ原に馬を放牧し、將士を會して之を驅逐し、騎馬戰の演練を試みたことが起源らしい。相馬氏が封を奥州相馬に移して後も雲雀ケ原に馬を放牧し、此の行事を行ふこと六百年、以て明治に及んでゐる。廢藩後は、縣社太田・小高・中村の三神社の祭祀として復興せられ、大陽曆の七月十一日を宵乘、十二日を野馬追、十三日を野馬懸と改めて、之を行つて居る。想ふに相馬藩は僅に六萬石の小藩であり、伊達其の他の雄藩に介在して、よく其の領士を保全する爲には、先ず武を練ることが第一であつた。然し、大平時代に公然と武を練ることは幕府の忌諱に觸れる恐れあるを以て、祭祀に事寄せたのであらう。野馬追には藩公自ら總大將として出陣し、軍容を檢閲し、士氣を鼓舞し、馬術を訓練したものである。斯くして野馬追は、今尙郷土の華として殘されてゐるが、その内容は時代の流れと共に變化し、雄壯絢爛なりし昔の面影は乏し。

明治四十一年、大正天皇皇太子に在せられ、東北行啓の

際臨時野馬追を舉行して長くも御臺覽を賜り、爾來一層天下に宣傳せらるゝに至つた。昭和十三年七月十一日には、舊藩主相馬子爵の下に、意義深き一千年祭執行せられ、十二日の野馬追には、出場騎馬騎馬武者一千餘騎、拜觀者無慮六萬に達し、空前の賑ひを呈した。

祭場地は、東西八軒、南北四軒の廣漠たる雲雀ケ原であるが、七月十日の宵乘には、午後三時頃より騎士が武を練るに相應しい古式の競馬が初まる。出場の騎士は何れも陣笠陣羽織の輕裝である。翌十二日の野馬追に出陣する武者は未明に起き、祖先傳來の甲冑に身を堅め、家紋を染め抜いた旗指物を翩翻と打ち靡かせながら、近郷近在より二騎三騎、點々林間を縫ふて馳せ參ずる光景は、眞に一幅の繪巻物である。午前九時頃、中天に轟く狼火を合圖に、騎馬の群は原ノ町の北端新田川原に集結し、列を整ひ、陣貝陣大鼓を打ち鳴らし、三社の神輿を奉じて一千餘騎、歩武蕭々として原ノ町を過ぎ、雲雀ケ原の祭場に行進するのである。其の儼然たる偉容は、元龜・天正に於ける古武士の出

陣を偲ばしめ、實に天下の壯觀である。やがて雲雀ヶ原の一角、本陣山上に三社の神輿を安置し、騎士は各々所屬の纏下に集合し、正午過ぐるや、本陣山より陣貝の聲音朗々と鳴り野馬追始まる。即ち妙見三社の神號旗を狼火に打揚げ、ここに壯烈極まる争奪戦が展開する。十三日の野馬懸は、午前九時より小高妙見神社境内なる舊城址の廣庭に竹棚を結び、木戸を開き、雲雀ヶ原より駆け出したる野馬に擬して、遙か山陰より騎馬武者數十騎を以て、十數頭の荒馬を此の中に追ひ込み木戸を閉づ。次で小人と稱する白衣を着けた健兒數十人、鯨波を揚げて馬群に入り、之を捕へんとして野馬と格闘する奇抜な祭事であるが、東北の一隅に、數百年の推移を物語る生きた歴史が、かくも完全に保存されて居るとは、國寶的存在と賞しても溢美の言ではなからう。

日立木村の百尺觀音は、昭和聖代の一大美觀にして、然ゆるが如き信仰心に富む彫刻家荒嘉明氏が、寢食を忘れてこれが完成に精魂を打ち込みつゝある。觀音建立の由來を

説いて曰く

夫熟々惟ルニ泰西ノ邪教ハ煩惱ノ心ノ夢ヲ貪リテ追ヘ共去ラス 菩提ノ鹿ハ影ヲ消シテ招ケ共來ラス 佛日慈恩ノ正法ハ早ヤ薄クシテ本有心連ノ月光微ナレハ露命イカナル道草ニカ落チン 無情忽チニ到リ紅顏亦暫クモ停メ難シ 是辰三世ノ宿縁ニ因テ御身丈壹百尺ノ大聖觀自在王菩薩馨國日立木村三峯山ノ岩壁ニ牛肉彫刻シテ建立再來ヲ來キ願ヒ奉ル

抑モ觀世音菩薩ハ法妙相ヲ具定シ普門示現ノ神通力ヲ持ツテノ故ニ一切ノ功德無盡法界ニ充滿彌綸セサルナク國王大王妻子奴卑畜生ト雖モ大凡因果ノ道理歴然トシテ生シ大道ノ巷ニ冥々タリ 正ニ觀世音菩薩ヲ念シ懺悔滅罪ヲ願ハハ皆悉ク阿耨多羅三藐菩薩ヲ得テ齋シク妙眞連臺ニ登ランコト人天誰カ疑ハン

由來相馬郡日立木村三峯山ハ太古往時ノ物語リ豊ナリ幽寂閑雅霞巖巖キテ清淨ノ念老松ノ枝葉ヲ鳴ラン春秋ハ華鳥舞ツテ菩提ノ歌ヲ讚ヒ夏冬亦猿鶴棊ニ遊フ 雲水ハ

茲ニ錫ヲ曳キ來ツテ小手ヲ翳シ遙ニ東方ヲ望メハ白沙青松ノ間ニ大洋浪靜ニシテ漁帆點々出沒シ仰ケハ阿武隈ノ連峯天ニ懸リテ白皚々トシテ塵外清淨ノ靈山轉夕肅然タルヲ覺ユ 噫實ニ佛緣ノ深キコト斯ノ如ク茲ニ壹百餘尺ノ大觀音菩薩像ヲ建立シテ有緣六道四姓法界萬靈ノ爲ニ誠ニ能ク一朱半錢ノ喜捨淨財ノ奉謝ヲ待ツテ今世後世ノ善根トナサン

翼者救世ノ南無聖觀音菩薩像建立ノ因緣ニ依リテ吾等象皆共ニ菩提心ヲ發セン依而勸進修行ノ願文如件

福島市の西北八杆餘、東方摺上川を隔て、湯野温泉を含む飯坂温泉は、紹介するまでもなく絃歌さんざめく情緒豊つぶりの温泉郷であつて、北へ二杆の穴原・天王寺温泉と共に著しい發展を示し、特に春秋二季の福島競馬には記録的超満員である。然し此の温泉も滋味のない勢か、私は左程魅力を感じなく

ハ一

戀のみちのく ナア

戀の陸奥 人目を信夫

サテ サテ サテ サテ

首尾も飯坂 湯のけむり サテ

寄らんしよ 來らんしよ 廻らんしよ

ササカ サカ サカ 飯坂へ

の飯坂小唄も、低級な艶歌師の音律にしか響かない。こんな言ひ方をすると、變挺に解する人もあるかも知れんが、自らの心を伴ふことは、誤解を受けるよりもつともつと辛い苦行であること位は知つてゐるつもりだ。さりとて、初旅の人にはやはり面白く愉快な温泉の一つであり

ハ一

泣くは河鹿か ナア

サテ サテ サテ サテ

泣くは河鹿か あの娘の聲か

こよひ別れの 十綱橋 サテ

寄らんしよ 來らんしよ 廻らんしよ

ササカ サカ サカ 飯坂へ

にある「こよひ別れの十綱橋」に立つて、釣橋時代の紅浜史に、今昔の推移を想ふのも捨て難い情趣であらう。

「みちくのしのぶもちずり誰故にみだれそめにし我ならなくに」の文和摺觀音に、河原の在大臣と虎女とのローマンズを探り、西方を間近に見下せば首都福島市である。市の東部一帯は、阿武隈川改修に依る護岸築堤成り、又主として耕地に屬する北東部は、耕地整理事業の完成に依りて、

都市の形態は全く昔日と一變し、商工都市として發展の途上にあるが、市を中心とする國道に付ても、昭和六年度以降改良されつゝある。先づ昭和六年度に於て、市内五十邊と信夫郡瀬上町の三千四百四十九米の改良に着手した。本區間の道路は屈曲多く、人家連擔し剩へ福島電氣鐵道との併用關係等もあつたので、現存道路の東側を併行北走する新線により執行されたのであるが、之に依つて延長百六十五米の松川橋と、十二米六の八反田橋及四米一の蛭川橋が轡を揃へて堅牢化し、柳町本町間八八〇米竝に本町會根田間八六一米の鋪裝は、從來の交通難に一脈の曙光を齎した

が、福島電氣鐵道の新設軌道計畫が決定せぬ爲、該方面の國道改築問題は暗礁に乗り上げた形である。現下の交通情勢に徴し甚だ遺憾の極みであるが、本計畫の遂行には莫大な費用を伴ひ、當會社の懐勘定をあてにしては到底これが實現は望めまい。會社の積極的熱意と縣の厚意ある支援を頼みに、福島市の飛躍的向上と發展とを衷心より期待する。

昭和十二年度竝に十三年度東北振興事業として、飯坂温泉と信夫郡平野村地内の五號國道交叉點に至る府縣道飯坂福島線の改築鋪裝が、如何に素晴らしい効果を收めつゝあるかは、福島市から飯坂温泉へドライブした人は誰でも直感するであらうが、路面外に整然と移轉された軌道と電柱の一大美觀には、併用時代の醜狀を知る人も知らぬ人も絶讃を惜まぬであらうことを特記したい。

軍事的色彩を多量に盛る栗子峠には、昭和八・九・十の三箇年度に於て五拾壹萬五千圓を捻出し、三八四米の二ツ小屋隧道と、四〇〇米の栗子隧道との貫道を見たのであるが、栗子隧道に登り詰めるヘヤピンカーウをドライブする爽快



味は、なんと言つても紅葉期に止めを刺すが、炎熱金を溶す眞夏と雖も尙中秋の涼風を切る趣がある。昭和九年度より十二年度迄繼續して執行した福島市以南は、一日も早く郡山市へ連絡せしむる意氣込で懸つたが、無念、十三・十四兩年度は休工の悲運に遭遇した。郡山市としては大概痺れを切らしたのであらう。先達以來果敢な促進運動を開始し、當局へ膝詰談判の體當りだ。喜ばしい抗議である。來年度は是非モノにして、其の誠意と熱望に酬ひたいものだ。

郡山市を後に古色の出湯岩代熱海を廻ると、鏡の湖水猪苗代湖に出る。湖畔なる翁島村字三城瀉の水吞百姓家に、彼の醫學の恩人、野口英世博士が呱呱の聲を擧げたのだ。幼名を清作と稱し、貧困の中にも強い母の愛に包まれて、健かに生ひ立つた。猪苗代高等小學校を卒業するに及んで其の優秀拔群を認められ、恩師小林訓導の推薦を得て、當時若松町(現在若松市)に於て、渡邊鼎氏の經營して居た會陽醫院の藥學生となつた。これが清作をして、世界的大學者たらしめたスタートである。上京後の不眠不休の獨學は、

二十二歳にして醫術開業試験にパスせしめ、高山醫學院の學僕から、一躍講師として教壇に現はれた時は、「小使が先生か」「鈴振りが先生か」と、生徒達の輕侮の色は押へ難いものがあつた。然し一度講議をし出すと、滔々と流れる博學多識には一同舌を卷いて心服したといふ。蓋し、彼の人生史を飾る華々しい一頁であらう。

萬里の波濤を蹴つて渡米した英世博士が、其の眞價を發揮したのは、蛇毒に關する研究が第一歩であつた。間もなく、その研究をフィラデルフィアの醫學大會で發表して、集ふ碩學大學を驚嘆せしめ、一箇年二千弗の獎學資金を與へられ、正式にペン大學の助手に任命せられた。これによつて、彼の前途に輝しい光明を齎し、旺盛なる研究を一層勇氣附けたことは言ふまでもない。破竹の勢で研究を進めた英世博士は、遂に米國から公費を以て丁抹に留學し、大正二年ウキンで開催された第八十五回獨逸萬有學會及醫學總會に、米國の醫學會を代表して講演するため招聘され、世界的野口の名聲を獲得したが、十三年前の孤影を顧て、

轉た感慨無量であつたらう。

アメリカに渡つて早くも十六年の流月を闊したが、決して故郷を忘れはしなかつた。名聲と地位が高まるにつけても、案ぜらるゝは故郷の両親と、恩愛の人々であつた。然し、細菌學の研究は到底其の餘裕を許さなかつた。或日、一友人から届いた懐しい母の老衰せる寫眞を見て急に心せき、愛妻メリー・ダーヂスを殘し、獨り歸朝の途に着いた。横濱埠頭を埋める人の波と、十六年前の寂しい門出を臉に映して涙し、嗚かし、恩師小林氏の姿を第一番に求めたことであらう。

久し振りで母への孝養を盡した英世博士は、再び米國に渡り、黃熱病の征服に身を賭して戦つたが、惜むべし、不幸にも猛烈な黃熱病の病毒に襲はれ、遂に研究の尊き犠牲として、昭和三年五月二十一日、アメリカ西海岸ゴールドコーストのアクラに於て壯烈なる死を遂げた。齡五十三であつた。英世博士の死、一度全世界に報道さるゝや、東西南洋の新聞は、筆を揃へて不世出の英雄の逝去を悲み、こ

れが上聞に達するや忝くも破格の恩命に浴し、勳二等に叙せられた。

英世博士の生家は、今尚猪苗代湖畔に昔のまゝ保存され、其の小庭には、博士の遺髪を埋めて、野口英世博士誕生地と刻した記念碑と

#### 忍 耐

正直は最良の手段なり。(英文)

忍耐は苦しされど其の實は甘し。(佛文)

と書いた記念碑が在る。博士の直筆を刻したものである。更に去る五月二十一日、英世博士の幼友達等の組織する財團法人野口英世博士記念會の手で、生家の東隣に野口博士記念館が建設され、博士を慕ふ人々の巡拜地となつたことは、會津地方のみでなく、日本が世界に誇り得る不滅の金字塔であらう。

因に、英領アクラの記念塔の銘文と、紐育ウツドロイン墓地の墓誌とは、世界人類幾百萬人の救世主と仰がれし偉業を讃える永遠の礎石として、燦然輝きを放ちつゝあるこ

とを書き加へて置かう。

銘 文

英領アクラニ於テ

研究中ナリシ黃熱病ノ爲ニ

一九二八年五月二十一日 ト

二十九日ニ

相次テ殉職サレタル

ロツクフェラー財團ノ野口博士 ト

醫學研究所ノ所長ヤング博士

ノ功績ヲ偲フ

墓 誌

野口英世

一八七六年十一月二十四日

日本猪苗代に生ル

一九二八年五月二十一日

アフリカゴールドコーストニ逝ク

ロツクフェラー醫學研究所正員

其ノ努功ハ科學ニ捧ケ盡サレタリ

人類ノ爲ニ生ケル彼ハ人類ノ爲ニ死セリ

歴史の國であり、産業の都市であり、名勝の地である松平侯二十三萬石の舊城下若松市は、維新の改革より多數の變遷を経て、明治三十二年市制が實施された。彼の軍學者山鹿素行の誕生地であり、戊辰の役に、三十有餘藩の大軍を引受けて、奮然死守せんとした鶴ヶ城跡は、内濠と石垣のみが昔の面影を止むるに過ぎないが、松吹く風にも維新が偲ばれ、心に映る戰況に新しい同情の涙が滲む。

時代の潮流は遂に會津の開城となり、城主容保父子涙を呑んで三千の志士と訣別し、風姿蕭然として江戸に下る。

あすよりはいづくの人が眺むらん

なれし大城に残る月かけ

守護職時代忠誠を抽んじ、孝明天皇の御親任を辱ふせし容保公も、一朝廷議の激變するや、不幸朝敵而かも賊魁視せられ、加之、廟堂の文武百官何れも容保公の宥罪を唱ふるものなく、嚴刑論のみが旺盛を極めた。然るに、斷乎とし

て無量の仁慈を垂れさせ給へるは、明治天皇であつた。容保公の爲深く叡慮を惱ませられ、辱くも責を御一身の不徳に歸し給ひ、遂に論旨を下して死一等を減しさせ給へるは、恐れ多くも畏き極みであり、聖恩の宏大無邊に、感涙潛々として頬を傳ふ。

會津武士の誠忠にして、高潔無比なる氣風は、戊辰戦史の物語る所であるが、鶴ヶ城開城の際、軍監たりし中村半次郎即ち後の桐野利秋、城受取りの大任を果して曰く

元來子は人を斬り人を斃すの術を知るも、學問に至りては固より其の必要を感じしことなく、つまり書は以て姓名を記すに足る。など、豪語して居たりしが、今

日といふ今日は、慚汗骨に徹し、差出されたる書類を見て、何が何だか判らず、従容自若をよそほへども、心中の苦しさ殆ど卒倒せん許りであつた。此時、若し予が日本外史を素讀し得るの能力ありしならば、心中何等の不安なかりしならんに、それさへ出來ず、漸く虚威を示したるに過ぎざりしは遺憾なりと、又式後城

中に入り天主閣の彈痕無慮なるを見、再び愕然として城兵の沈勇剛毅なりに驚き蹉嘆良久うせり。

これは、文學博士鹽谷溫氏が、會津中學校に於て講演された一節だそうだが、幕末の劍人中村半次郎の心膽を寒からしめた勇壯は、會津藩ならではと賞したい。

紅葉見に來た飯盛山で

紅葉見ないで男泣き

藩校日新館に學んだ十六・七歳の少年を以て編成された白虎隊が、朱雀・青龍・玄武の各隊中最も史上の華として譚はれた由縁は、蓋し其の最期を讚美する日本精神の結晶であらう。

頃は戊辰の中の秋

廿三日の朝まだき

戸の口原の合戦に

やむなく引き揚漕漕の

飯盛山によぢのぼり

遙かに見渡す鶴が城

焔は空に立ち上る

はやこれまでと十九人

いさぎよく

血汐に染みしもじ葉の

赤き心を偲れば

袖に露散る白虎隊

火焰に包まれたる鶴が城を伏拜み、此の上は一死君に殉ずるの外なしと、或者は文天祥正氣の歌を誦し、或者は辭世の句を誦して、從容薔の花と散り行きし心情を汲めば、男泣きするのは豈西條八十氏のみならんやである。

山上の堂々たる記念碑は、伊太利首相ムツソリニー氏が白虎隊の忠烈を賞讃し、遙か故國より贈りたる國寶的記念碑である。石の柱は元ローマの古い宮殿にあつたもので四方にある四つの鉞は、團結して國難に當る黨章を現したもので、フアシズムのシンボルである。記念碑の表面には

ローマ市

文明の母たるローマは

白虎隊勇士の遺烈に

不朽の敬意を捧げん爲め

古代ローマの權威を表はす

フアシスタ黨章の鉞を飾り

永遠偉大の證たる

千年の古石柱を贈る

西曆紀元千九百二十八年「フアシスタ」  
とあり、表面には

ローマ市

武士道に捧ぐ

と刻してある。相並んで建つもの一つの記念碑は、元駐日ドイツ武官、エツツドルフ氏が、昭和十一年此の墓に參拜し、感激の餘り白書して贈つたものである。

ドイツ武士より會津の少年武士に贈る

ハツフォンエツツドルフ

此の兩碑に依つても、白虎隊の赫々たる忠烈が、遠く外國にまでたゞえられ、日本武士道の精華として歴史に残る會津魂への憧憬を、如實に證據立て、三國間の精神的親善をより意義あらしめるであらう。

「出羽で庄内・最上で上ノ山・此處は會津の東山」と、古來奥羽の三樂境の一たる東山温泉は、湯川の溪流に沿ひ、唄に名だたる磐梯山を仰ぎ、四季さまざまに變る錦繪の様な風光美は、樂園地の評に恥ぢない。天平年間、行基菩薩

巡錫中の發見によると言ふから、もう一千二百年は經とう。「東山から日にちの便り行かなざるまいエーマタ顔見せに」でもあるまいけれど、東山獨特の味を會得した粹人には、どうしても忘れられない戀しさがこみ上げ、一度は二度、二度は三度と心動くのも亦己むを得ない。

若松市の西方約二十五軒、日本三虚空藏の一と數へられる柳津虚空藏は、清流只見川の岸高き巖上に建てた舞臺造りの大堂宇で、古くから靈驗あらたかを以て鳴り、數十萬の信者を擁すると言ふ。此の靈場にも、近年温泉郷建設の聲が高いので、今から縁日頃の雜沓が思ひやられる。

若松市内の舗装は、昭和九年度以降の執行に係り、東北振興事業に依るものを併せ、其の幹線は大體整備状態に進み、東山温泉とも立派に舗装連絡が成つた。若松市より福島市・郡山市・米澤市・宇都宮市及新潟市へ通ずる指定府縣道も匡救事業に依り局部的改築を了へ、更に東北振興に基き著々大改良の途上にあるから、三島通庸氏の大道路計畫の實現も昭和の聖代には達成されるに相違ない。封建時

代に於ける會津方面と江戸との交通は、主として會津街道（若松市より南會津郡田島町・栃木縣上都賀郡今市町を經由して東京市に達する）によりたるものであつて、會津侯も、本街道を駕籠に揺られて屢々參勤されたのは明かである。先年、本道路を米澤市に連結する國道たらしむべく、沿道關係者の猛運動熾烈なるものがあつた様に思ふが、何時しか下火になつてしまつた。縣廳移轉問題に絡んで、福島・郡山兩市に對抗し、若松市が大董となつて、争奪戦を演じた樂屋を胡げば、國道問題の旗頭として活躍した動機も不思議ではなからう。

福島縣の地形から考究すれば、濱通りの六號、中通りの四號兩國道に伍して、會津地方にも一本の國道があつても不自然ではなからうが、地勢、築造費、或は産業經濟等の關係に立脚して論議さるゝとせば、其の貫徹には多大の反對と犠牲は免れまい。然し、やがて道路代議士でも出現したら、本件の成否は別として、再燃の狼煙は、會津方面の山野を揺がすであらう。(つゞく)